

〈論文〉

昔話『蛇婿入』にみる心の変容 ——殺された蛇の視点から——

前川 美行

はじめに

日本昔話の一つである『蛇婿入』は、「^{おだまき}芋環型」「^{みづこい}水乞型」など類話の多い昔話である。それは時を経て伝承されるにつれて、物語そのものが人々の心に合わせて象徴的な変容を遂げてきた物語といえよう。人々の心のあり方や社会のあり方とともに語られ、伝えられてきた生きた物語なのである。

それはまた現代の私たちの心にとっても通底するテーマを内包している。そこで、変容し成長する蛇婿入物語をまず紹介し、母・父・娘の視点からの“内なる女性”のイニシエーションとしての物語解釈を行った。さらに、蛇の視点からの分析を試み、事例の夢とともに、「針を抜く」こと、蛇の再生の心理的変容における意義について一つの考察を試みた。

1. 『蛇婿入』物語

昔話『蛇婿入』は『猿婿入』などと同じく「異類婿」と分類され、芋環型・水乞型・姥皮型の3類型に大きく分けられる。まれに女性が蛇である類話もあるが、ほとんど蛇は男性である。子どもの頃、絵本・アニメ・親からの口承話として聞いたり、読んだりした昔話の中で、『蛇婿入』を知っている人はどのくらいいるだろうか。あまりいないのではないだろうか。セミナーで聴衆に問いかけた際にも、また大学ゼミ生に尋ねた際にも知っていたと答えた人はほとんどいなかった。このように、日本各地に伝わり、類話の多い昔話であるにもかかわらず、子どもに語る昔話集には入ることが少ないのも『蛇婿入』の特徴である。

その特徴は特に芋環型において顕著である。水乞型は「手無し娘」に繋がり、姥皮型は「姥皮」に繋がり、それぞれに語られているが、特に芋環型は

語られることが少ないようだ。異類との知らぬ間の婚姻や異類殺しの意味が読み取りにくいからだろうか。意識から遠いものは忘れられやすいことを思うと、語られない物語としての苧環型は現代の隠されたテーマを表している可能性もある。ここでは、まず物語のテーマと展開を類型ごとに比較して考えてみよう。

(1) 苧環型

苧環とは、麻糸を空洞の玉にして巻いたものだが、物語の中で針に通された苧環の糸をたどることから「苧環型」と名付けられている。

まず初めに『蛇婿入』苧環型の一つ、熊本県・天草郡に伝わる物語を紹介する。

—娘が妊娠する。男の姿は娘にだけ見える。乳母が木綿針に糸を通して男の襟に刺させる。乳母が糸をたどると水の中に入っている。立ち聞きするとお前は金気を持っているから仲間に入れぬ。俺は子どもを持つぞ。人間は知恵が多いから魔の子は三月の桃酒と五月の菖蒲酒でおろすと語るのが聞こえる。(後略) (関敬吾編 1978)¹⁾

これは親の知らぬ間に娘と付き合い妊娠までさせたけしからん男(蛇=異類)を殺し、異類との子どもを墮胎させる物語であり、純朴な娘を母の知恵が守っていると受け取ることができる。さらに現代に伝わる“桃の節句”と“菖蒲の節句”の由来を説明する物語のようでもあり、子どもの健やかな成長を祈る意味が込められているとも受け取れる。すると娘を守り、さらに生まれてくる子を邪気から守り健やかに育つために伝承される知恵の物語とも考えることができよう。

またここで「金気」と呼ばれている針は、家事の道具であることから“女性”に属するものと考えられると同時に、鉄製であることから“文明”や“意識”を表わすとも考えられる。

臨床心理学者でユング派分析家でもあった織田尚生(1993)²⁾は、この物語を「父権的ウロボロスの侵入を受けた娘」が「内なる原初的な母であるグレートマザーとして機能した母親の援助で、蛇の子を流産」し、「母娘の姉妹的關係の段階の枠」を越えられずに終わる物語と解釈している。

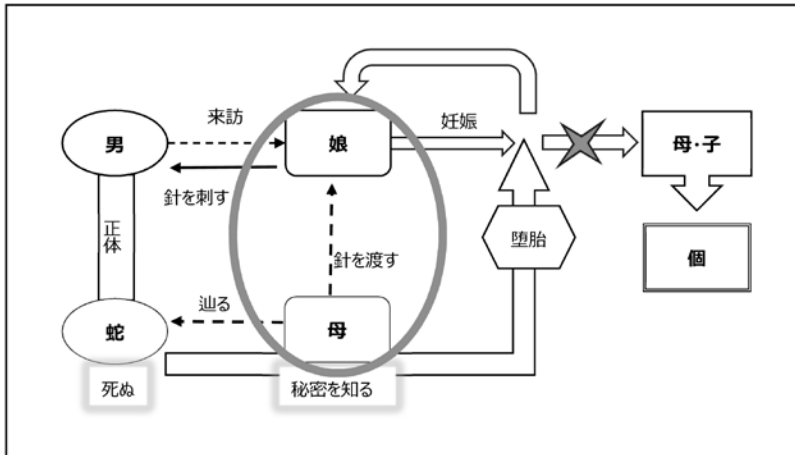


図1 蛇婿入(芋環型)：「母の視点」から見た調和

この解釈を意外に思われる方もいるかもしれない。異類の子どもを妊娠して子どもを産んだとしてそれが娘にとって幸せかどうか、親の視点からすれば明らかにノーであろう。娘には幸せになってもらいたいと願うのは自然な親心であり、男の正体を突き止め秘密を知り、蛇の子を産むことを阻止した母の知恵は称賛されこそすれ責められることではなかろう。

しかしながら織田の述べる通り、確かにこの結末では娘は家から出られない。“娘”としての段階から子どもを産むという形で次の段階に進む展開が生まれたのに、阻止されたのである(図1)。さらに娘の意思は語られず、母の行動のみが述べられていることも特徴的である。つまりこれは「母の視点」の物語なのである。結果として娘は母の許にとどまり、成長を止められる。図1のようにグレーのリングの中の関係は維持され、この親子は「母娘の姉妹的關係の段階」ととどまる(織田)のである。

もう一つ、芋環型として香川県・三豊郡に伝わる物語を紹介しよう。

— 姫のところ侍が通ってくる。母が縫い物針に糸を通して頭の鬻に刺させる。糸をたどると洞穴に入っている。立ち聞きすると、黒鉄を立てられたので死ぬが、子どもをこしらえたという。しかし三月節供の桃の花酒を飲むと、桃の悪で子は下りるといふ。三月の節供の酒を飲ませると蛇の子がたくさん産まれる。(関 1978)³⁾

蛇の子どもは天草郡の話のように墮ろされる場合のほか、この三豊郡の話のように立派な子として生まれる場合、あるいはたくさん生まれてそののち殺される場合などさまざまである。生まれたとしても「蛇の子」であり、グレーのリング内に受け入れられることはない。

この二話では乳母や母が糸を辿り秘密を知る役割をとるが、母ではなく娘自身が糸をたどる話もある。しかし父が登場する話は大変少なく、織田の指摘するように苧環型では「母娘の姉妹的關係」が世界の中心であり、その調和が保持されていると言えよう。

以上のことから、苧環型に共通するあらすじは、“素性の知れない男が娘のところに通い娘は妊娠するが、男に蛇を刺す。針を刺された蛇は死に、蛇の後をつけた母は秘密を知る。そして子どもは墮ろされ、世界はもとに戻る”というものである。図のグレーリングはそのまま閉じる。

以上のように苧環型は母の視点からの世界の調和が中心である。カップル誕生をよしとする物語と比較すると、カップルは形成されず子どもも望まれない。グレーリングの開放は阻止されている。また、娘の意志や感情が語られないまま妊娠したり墮ろされたりする展開であるのも特徴的である。苧環型では「娘」という存在は、異類の来訪を受け入れ次世代を生みうる身体的な存在としてのみ物語の始まりに登場し、それ以外には展開にも終わりにも関与しない。母（原初的グレートマザー）の視点からは、意識の目覚めによる娘の解放は不要なのであろう。

ところで、物語の始まりは男（蛇）の来訪である。日本神話ではスサノオの狼藉に怒ったアマテラスは天岩戸に引きこもってしまったが、苧環型の素性のわからない男は激しく破壊する力は持たず、あっさり針に刺されて死に、秘密までも知られ子どもも殺される。苧環型は圧倒的な母（グレートマザー）の力が支配している物語である。

（２）水乞型・姥皮型

次に水乞型について考えてみたい。水乞型は話の始まりも展開も苧環型とは異なっている。まず、福島県・南会津郡に伝わる水乞型を紹介しよう。

——干天のとき、長者の頼みにより雨を降らせ、蛇は約束通り娘を娶

る。娘は針千本と瓢箪千を持って嫁入りする。その瓢箪を沈めにかかった大蛇は疲れはて、針を体に刺されて死ぬ。(後半姥皮。娘は逃げる途中、蛙の婆から姥っ皮をもらい、飯炊き婆としてある長者の家で働く。夜、姥っ皮を脱ぎ観音経をあげていると、その息子に見られる。息子は病気になる。占いもののおり家じゅうの女を会わせる。娘が行くと病氣も治りその家の嫁になる。(関 1978)⁴⁾

水乞型の始まりは、「干天」である。自然が調和を失い大地が干上がっている状態は、世界のバランスが崩れていることを象徴的に表している。芋環型では安定した世界が突然の来訪者によりバランスを崩されるが、来訪者を殺し墮胎すれば世界の調和は取り戻される。しかし、水乞型では自然のバランスが崩れた状態から物語が始まる。

そこで自然の調和や世界のバランスを取り戻すために「父(長者)」が蛇と取引をする。意識を持ち取引をする父という存在が登場し、物語の世界には男性原理が生れている。父は自然の霊力を持つ蛇に雨を降らしてもらい、引き換えに娘を差し出す。娘は供犠となり、父は娘を失う。すなわち、雨は降ったものの大事なものを父は失うことになる。

供犠として差し出される娘はギリシャ神話にもグリム童話にもみられる。三人娘のうち上の二人が拒絶し、末娘が承諾するという物語もある。また水乞型では蛇を殺した後、村に戻る話と、村から出て姥皮型と結合する二通りの展開があり、蛇を殺す際には針や瓢箪が使われることが多い(関 1978)⁵⁾。針は女性と文明の力の象徴であり、瓢箪は鈴なりの実の付き方や末広がりの実の形などから縁起良く呪力を持つと考えられていたものである。

父は、大地の豊饒性が失われた初めの状態に対して、大地を潤し調和を取り戻そうとしたが、再び豊饒性は失われる取引をする。娘を差し出すことで命のつながりが絶えることにもなるからである。作物は得て富は得ても、命は絶えていく図式が父の物語なのであろう。以上のように、父の視点から作られる世界は女性原理を喪失し均衡を失っている。

ところで、娘の視点で見るとどうなるだろうか。物のように取引されてしまう娘が自分の知恵によって蛇を死に至らしめる。文明の利器と、自然の霊力によって娘は供犠であることと蛇から解放された。そこから「姥皮」物語

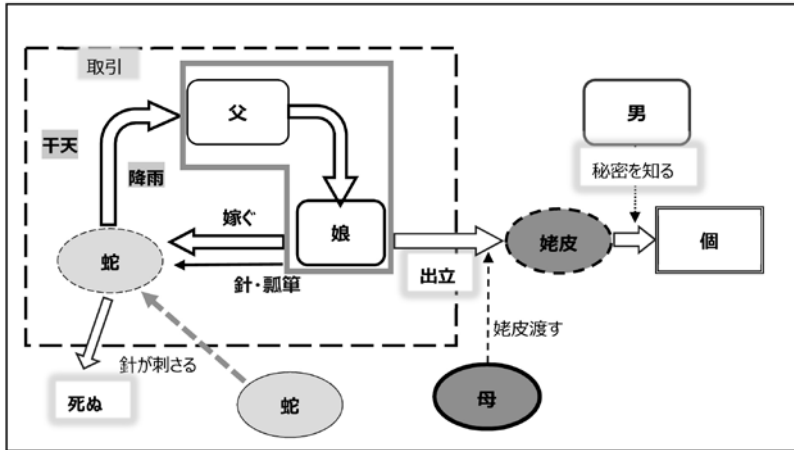


図2 蛇婿入（水乞型・姥皮型）：「父の視点」から見た調和と、「娘の視点」への移行

や「手無し娘」物語が始まり、生きる娘の視点からの物語が始まる。そして新たに男性と出会い結婚へと展開する（図2）。嫁ぐことは意思ではなかったものの、蛇を殺すことにより娘は出立、個として新たな関係を作り出したのである。

2. “内なる女性” 性の変容過程

(1) 分析心理学的物語解釈

以上述べてきたように、“異類との婚姻”として分類される蛇婿入の芋環型と水乞型では、始まりと展開・結末に違いが認められる。それでは、『蛇婿入』として括られるこれらの物語に通底する共通テーマはなんであろうか。物語としては“娘（女性）”が主人公であり、“娘の成長”をテーマとして挙げることができると考えられる。

ところで、臨床心理学、特に分析心理学の領域では、物語を心理的物語として象徴的に読み解く手法がある。昔話は、現実とは異なる世界を“語り”ながら、聞く人を物語の世界に引き込み、普遍的な心の真実を映し出して、聞く人の心を強く揺さぶるものと考えられている。

ユング (Jung, C. G., 1948-1999)⁶⁾ は、「神話やおとぎ話においては、夢におけると同様に、こころ (Seele) が自分自身について発言しており、さ

まざまな元型が自由に働きあつて」表れていると述べる。ユングは、患者の語る妄想やイメージが神話のテーマと類似していたり、共通の要素を持っていたりすることから、「人間の心の胚芽の中に意識に先んじて普遍的に存在している、自律的な原イメージ」の存在を概念化（元型）し、個人を通して表れてくる普遍的無意識による像と考えた。

また、ユングの直弟子である分析家フォン・フランツ (von Franz, M. L., 1975-1979)⁷⁾ は、「おとぎ話は、普遍的無意識的な心的 (psychic) 過程の、最も純粹で簡明な表現」であると述べる。無意識や元型のイメージは私たちには未知のものであり、言葉に置き換えることは不可能で、「物語の筋と結びついた全体のモチーフの中に」含まれるものから理解することが最良の方法であると言う。逆に言えば、表現されないままの無意識が自分自身を表現しようとする場合、「直感的な訴えや似たような材料への類推によって、聞き手たちの中に反応を引き起こそう」として、おとぎ話の姿で何度も人の心に語りかけ無意識自身の持つイメージを表現するというのである。

ここで重要なことは、“直感的な訴え”や“似たような材料への類推”という点である。無意識的心的過程の理解は、物語の登場人物に元型を記号的に当てはめて意味を探し、言語を読み解くように解釈を試みるのではなく、言語では表しきれない深い心理的体験をそのまま深く味わうことでもある。その場合、解釈が多くの人に物語そのものを味わったときに感じたような深い体験として心に落ちていくこと、「たしかにそうだ」と納得する解釈であることが重要である。深い味わいを持つ詩を単に散文で解説するのではなく、詩の訴えるものをより深く理解できるような解釈になることが分析心理学的な解釈の特徴である。

さて、そのように分析心理学領域では、昔話や物語を心理的物語として象徴的に解釈してきたが、それは個人的心理の物語にとどまらない。元型という言葉からもわかるように、普遍的なテーマを内包している昔話の理解は、私たちが生きている現代における心の真実、すなわち普遍的な心理を理解することに繋がると考える。そのような分析心理学的手法で日本昔話やグリム童話を分析した河合隼雄の著作『昔話の深層』(1977/1994)や『昔話と日本人の心』(1982/2002)は高く評価されている⁸⁾ ことからわかる。

(2) 心理的変容の物語として読み解く

ここで、『蛇婿入』を分析心理学的に解釈した論考を紹介することにした。

織田尚生 (1993)⁹⁾ は、蛇婿入の二型の差異として異性とのかかわりの違いに注目し、“内なる女性”の変容方向性の差異を心理的発達段階のようにとらえている。織田は、新しい関係が生じる変容は、“内なる女性”が自身に沸き起こる激しい怒りを意識的に生きることから展開すると述べる。芋環型では、娘は、母の言葉通りに蛇に針を刺し、自身も墮胎される。しかし、水乞型では娘は父の言葉通りに取引に従い、自然の霊力への畏敬の念を持っているかのように嫁ぐことを承諾するが、同時に針と瓢箪を用意し、それをわざわざ池に落として蛇に沈めさせるよう術策を弄する。この術策を、織田は心理的に発達した意思を持った娘ゆえの行動ととらえている。娘は怒りに基づいて術策を弄したのであり、怒りを込めて対決したと考えている¹⁰⁾。

織田は、瓢箪&針作戦を行う娘は、芋環型における存在の薄い娘とは明確に異なると述べる。そしてこの違いに注目して、内なる女性が自分自身の内に沸き起こる激しい怒りを意識的に生きて、「対決」(父権のウロボロスとの対決)することによってこそ自分自身を開放できると述べる。内なる女性が新しい異性との関係を成立するために、すなわち人格の中で新たな統合が起こるために必要なことである。織田は女性自身の持つ攻撃性に言及し、心に「普遍的」にある「怒りの女性」が切り開く変容過程と考察した。男女全ての人にとって心の内にある“内なる女性”性の心理的変容と言えるだろう。

“「怒り」の感情を生きる”ことを重視している点は、男性的な理解であると筆者には思われる。「怒り」による術策、「対決」等ととらえること自体が、男性原理に基づいた男性の視点で見た“内なる女性”の物語解釈と筆者には思われるのである。

筆者は水乞型のこの場面から、少女や子どもの主人公が知恵によって窮地を脱する昔話や物語を連想する。小さな子どもが霊力や守りの力を借りて、鬼や山姥に一杯食わせるという愉快的な昔話の類である¹¹⁾。和尚や母などによって授けられた知恵であったり、動植物から教えられる秘密であったりする。娘は助けを求めたり恨んだりするのではなく、権力や自然に翻弄される小さな存在として持てる知恵を精一杯働かせる。“術策を弄して”と言うよ

りも、“機略を講じて”自分自身を解放したように筆者には思われる。豊かな知恵は男性原理ではなく、このような無力な小さな存在を通して発現されると思うのである。

同様に河合隼雄（1982/2002）¹²⁾は、日本昔話に登場する女性に注目している。河合は日本人の自我は「女性像によって示す方が特徴をよく表している」と考え、昔話の中に登場する「女性の意識」という視点を重視する。昔話に登場する女性の持つ意識が、私たちの自我のあり方を象徴的に示唆していると考えるのである。その例として日本昔話に登場する“決意し、切断する、小気味よい女性”を挙げ、河合はその女性たちを「意志する女性」と名付けている。それは「わが国特有の過剰な感傷性から、ふっきれた存在として、さわやかな」存在であると説明する。昔話に登場する「意志する女性」のあつと驚くような行為は、男性原理から理解することや読み取るとは難しいが、因果律を超えた動きから解決が生まれ、結果的に事態に風穴を開ける。緊張しているときにふっとお腹がなつて気が緩んだり、笑いが生れたりするような状況である。それは、ユーモア、機微、とんち…などが持つ働きであろう。日本昔話においては、そのような働きが女性の姿で登場することに河合は注目した。その女性像は「男女を問わず持ち得る、自我＝意識のひとつの在り様」を示唆するようなふるまいをし、「新しい自我像を示すものとして注目に値する」と述べる。この視点から見ると、水乞型の娘が講じた瓢箪&針作戦は怒りによる対決の面のみではなく、“意志する女性”の持つ小気味よい知恵の力や新しい自我像を示唆していると言えないだろうか。

さらに河合は同じ著書の中で蛇婿入・水乞型の展開型でもある「手無し娘」物語を、“内なる女性”性の成長過程として分析心理学的に読み解いている。彼は、娘が手を切られ放浪することの重要性を指摘している。内なる女性の変容を人間の心の中にある関係性から読み解き、母なるものや父なるもの等の元型との関係や異性性との関係、異類なるものとの交流を解釈することで心の変容過程を考察した。河合の解釈は、物語を心の物語として主観的水準でとらえ理解する分析心理学の優れた視点を提示し、我が国における心理臨床の発展に大きく寄与した。

最後に、フォン・フランツと同じく女性分析家である山口素子の解釈（2009）¹³⁾を紹介しよう。山口は、蛇婿入物語に登場する蛇を殺す針に注目した。山口は山姥とは何かについて論考する中で蛇婿入に言及した。針は男

性的な攻撃性と破壊的な力を象徴すると同時に女性の内なる男性性を表すと言う。「針は、むしろもともと女性の自己としての山姥に属しているとも考えられ、女性性の中に本来的に備わっている攻撃性と破壊性と考えられる」と述べている。雛祭りの嫁入り道具にも鏡針揃が含まれているように、そもそも「針」は女性が日常生活で使用してきたものである。また文化的な針仕事は、一針一針「地道に刺し、加工していくことで、自然から文化への方向性を導く」作業であり、「針」は無意識の領域から意識を持った個としての誕生を促す働きを象徴していると言えるだろう。

山口是水乞型を、針によって父権的ウロボロスと戦い、自分自身とアニムスを変容させる物語と解釈している。すなわち、女性性の中に備わっている本来的攻撃性が発動して心理的変容が起こったと考える。針を女性自身の内なる生来的攻撃性と理解する視点が、織田の「怒り」と考える点と少し異なっている。ともあれ、織田も山口も日々の心理臨床現場で出会う問題から『蛇婿入』を分析考察し、女性の生き方や苦悩の理解に深い示唆を与え、さらに男性も含めたすべての人における“内なる女性”性の解放についての仮説を提示したのである。

(3) “内なる女性”性の解放

では物語の構造から、プロセスの象徴的意味について分析して考えてみよう。水乞型は世界の調和が崩れ、母の視点からの調和には戻れない状態から始まる。

不調和は、まず「干天」として描かれている。すでに述べたように豊饒が生み出されない状態であり、女性性がうまく働いていない状況であると読み取れる。

次に、取引をする父と蛇がともに男性として描かれ母の存在がないこと。つまり水乞型の世界は意識が目覚めた世界で、グレートマザーの力は排除される一方で男性原理に偏ってしまい、内なる女性性が疎外された心理状態を象徴していると考えられる。それが「干天」の表す状況である。父や王の登場、さらには共同体の形成など、社会の変化で象徴される自我の誕生や意識の獲得は、母娘関係を断ち切って個の成立を促し、社会的契約関係の始まりを生じさせた。しかし、その世界に欠落しているものがあり、それをいかに取り戻すかをテーマとして物語は展開する。

そこで男性原理が支配する世界の調和を取り戻すべく、父は蛇の力を得て支配力を強化しようとした。そして蛇を支配下に置くために娘（内なる女性性）を供犠として差し出した。蛇に娘を嫁がせることは娘を異世界に送り出すことでもあるが、同時に蛇を文明世界に取り込もうとしたとも考えられよう。図2で見ると、動物界の蛇を男性原理の働く文明（点線四角）世界に住まわせて自然をコントロールしようという行動といえるだろう。しかし、その支配力強化の企ては娘によって裏切られる。従順なはずの娘は自分の知恵を持ち、呪力を借りて蛇を殺し、男性原理の支配する世界から一人で出立したのである。ここで、娘は解放されたように思われた。しかし、供犠となった娘には名もなく住む家もない。さて、娘はいかにして生きていくことができるのだろうか。内なる女性性が生きることができると、それがすなわち女性原理を取り戻す物語になるのだ。

その時、出立した娘の前にグレートマザーは蛙の婆（姥）となって現れた。芋環型では人の姿で登場した母が、水乞型では家の外に棲む蛙の婆、すなわち動物に近い次元の存在として存在する。意識の獲得により家は父の家となり、娘はその家の住人となり、グレートマザーは家の外の住人として生きていたのだ。図2のようにそれぞれ異なる次元に生きていた母と娘がここで出会い、母は針ではなく姥皮を渡す。次元は異なっているが、芋環型の母も水乞型の蛙の婆も秘密めいた方法で娘を守るのと同じである。姥皮を被ることで、娘は動物の姿となって生き延びる手段を得た。一時的な姿である。

ここで、母と娘の次元の違いを扱った物語として継子譚を挙げてみたい。「米福粟福」の類話である「米ぶき粟ぶき」（黄地百合子 1984）¹⁴⁾を見てみよう。あらずじは、継子である米ぶきを継母がいじめるもので、後半はシンデレラと同じ型となり、汚い服を着た米ぶきの方が嫁に行き、実子よりも幸せになるという結末になる。

継子譚での「継母」の登場は、すでに「実母」が死に、娘と母の次元が異なっていることを示唆する。このような物語では母娘結合が分離されたことで個性化が進む（山口）。戻る場所である「母」との関係が断ち切られている継子の方は前に進むしかない（河合）。すなわち、母娘関係が断ち切られていることを継子という構造が表現し、それが個性化を促すことを示唆していると考えられる。

一方「実子」は結婚できずに母のもとに戻り、個性化には至らない。この

ように、継子／実子の違いを明示することは、母・娘の次元の違いをわかりやすく提示するものであり、個性化の道にとって重要な要素を物語の設定が示しているといえよう。

それに比べると、蛇婿入はより隠喩的な表現をとる。継子という設定ではなく、干天や取引を描くことにより、象徴的に母のいない世界を表現している。その世界で女性（娘）は供犠として旅立ち、自分を自らの力で解放する。母は妨害でさえあるように見える力（醜い姥皮）で間接的に娘を守り、そして娘は自力で生き延び個性化に進む。意識の覚醒によって男性原理が働くことは、自由で意志する内なる女性を押し殺しかねないが、内なる女性は自身の力で自由に意志し、機略を講じて自らを解放して生き延びる。これが、水乞型の示す内なる女性性の変容過程であり、同時に個性化の過程を示唆していると考えられるのである。

3. 供犠であること

ところで、苧環型の生まれる子どもは、貴種＝王として崇められる場合もある。図1のように意識が開かれていない世界では、来訪者と無意識的に交わり伝来物を受け取ると同時に、同質性保持のために来訪者に異類の汚名を着せて殺す。蛇殺しは自覚されることなく忘れられ、意識は目覚めない。ここでは、異類の子は王になる可能性と同時に異類として殺される可能性もある。

本論で引用した苧環型では、墮胎し清めの儀式をせねばならないと語られている。娘が集団に戻るためには儀式が必要で、それほどまでに社会が同質性を重視し閉じられていることを、母娘関係が同質のままであることとパラレルに描きだしている。

それに対して水乞型の娘は供犠となるが、蛇を殺し家から離れる。父の取引のために供犠としてのスティグマを背負った娘は、蛇を殺した後も家には帰れない。その後、姥皮を被ること自体が人とは一線を引く形になり、娘には共同体から孤立する分離方向の力が働いていることがわかる。死ぬべき人である供犠としての娘には、すでに名前はなく、帰る場所もなく、前に進むしかない。ここでは娘は、一時的に動物の次元に移行することで母娘結合に戻るが、それは仮の姿で夜には姥皮を脱ぐ。心の奥は人のままであり、自分

と向き合うかのように観音経をあげるのである。

そこで偶然の力が働く。競い合いやルールや論理的なつながりではなく、男性が“偶然に”娘の姿を見たことを契機に展開する。そして母の皮から脱皮する。それは、動物の次元での蛇との婚姻ではなく、人と結婚するという形で人格の統合がなされたことを示している。対立物である男女が統合され、個性化が進むのである。

供養であることは継子と同様に、母や親の力のみならず村という共同体からも分離したことを意味する。個人的意識や個人的無意識、そして家族や共同体の持つ共通の普遍的無意識から、異質なものとして締め出された存在ゆえに個性化は促進されたといえよう。

では、機略を講じて蛇を殺し自分を解放した後、姥皮をかぶった娘の個性化の契機となる「偶然、男性が見ること」とはどのようなことだろうか。『鶴女房』では見ることは禁じられたが、ここでは見られたことが娘の個性化を促した。

4. 蛇の視点から読み解く

(1) 殺された蛇の視点から

異類婚のような異類との交流は社会にとって禁忌であると同時に歓迎されることでもある。来訪者は歓迎されかつ殺されもする両義的存在で、共同体の健やかな維持と発展には欠かせないものでもあった。村＝共同体は閉鎖性を持つゆえに同質性は保たれるが、衰退を防ぐために異類の訪れと交わりは重要であった。社会に文明を伝来し、変容を促した鉄砲とキリスト教の伝来のように。

さてそこで異類の来訪者であり自然の霊力を持つ存在としての蛇に目を転じてみたい。

芋環型の蛇は、何らかの要因により境界を越えて人の世界へとやってきた。そこで見初めた娘と交わり、自分の子を持つ偉業を成し遂げ、蛇仲間にも自慢している。ところが、針を刺された蛇は仲間からは忌避される。同時に、針は自分にとっても悪い影響があり、命を落とす。この蛇は、蛇の世界から見ると蛇の世界の調和を崩し、新たな世界を切り開く存在でもあるようだ。トリックスターの領域を行き来し、ハイブリッドを誕生させる力を持つ

つ。まさに来訪者として相応しい力の持ち主であったのだろう。しかしながら、自然をも司るグレートマザーの力の前ではあっけなく殺されてしまう。自慢の子どもも殺され、領域を超えたこの偉業は知られぬものとなる。

また水乞型の蛇は、人と結婚することを条件に霊力を行使する。ここでもやはり何らかの蛇側の要因があって人と交わることが必要なようである。悪魔のように娘をさらうのではなく、自然と共存するこの蛇の存在は日本的であろう。そして父との取引を忠実に果たして娘を嫁にもらう。ところが無垢な花嫁にまんまと騙されてしまい、瓢箪を沈められず体じゅうを針に刺されて死ぬ。自然を左右できる力を持ち、雨を降らすほどの蛇があっけないものである。蛇から見ればかわいそうなことである。蛇にとっても雨を降らすことが決して遊びやゲームのような簡単な仕事ではなく、娘を嫁にもらうほどの難仕事であった。そして芋環型で人知れず娘と交わったのと同様に、正面から仕事の見返りとして娘を嫁にもらうことは蛇側にとっても何らかの必然性を持っていたのではあろうと筆者は考える。

約束どおり雨を降らし、また娘の言うなりに必死になって瓢箪を沈めようとする蛇の立場から見れば、何としても人との間にハイブリッドの子孫を残す必要があったのではないだろうか。その蛇を人はだましてしまった。その後、蛇は登場しない。あっけなく死んで忘れられた蛇。娘と同様、蛇も蛇世界の供犠であったのかもしれない。つまり娘と蛇は人世界と蛇世界の対であり、共に供犠であったと考えられる。彼らは各々の世界の調和を守るために捧げられた。ここで蛇が死ぬことにより、蛇世界の調和は守られたのだろうか。

(2) 刺された針を抜き、蛇皮を脱ぐ夢

供犠として蛇の命が捧げられたのと同様、供犠として捧げられた娘もやはり社会的な命を失った。蛇との出会いによって“内なる女性”は“意志”を持つ女性として動き始めたが、そのままでは生きられない。そこで、原初的グレートマザー（蛙の婆）が女性に力を貸した。一人で旅立とうとするものの名前や所属がない女性には、社会に出る前に社会から守るための守りが必要だった。その守りが醜い皮であった。では、その皮を脱ぐ契機になるのは偶然によるものか。個性化を促すものはなんだろうか。

ここで最後に蛇皮を脱いで個性化が進む過程の一つの仮説モデルとして、

筆者の担当した事例を紹介してまとめとしたい¹⁵⁾（※ご本人の許可はいただいているが、プライバシーの関係上、経過中の重要な要素のみを抜粋して紹介する）。

【事例紹介】

本事例は大災害に遭遇し一命をとりとめたものの、その後どのように生きていけばよいのかと途方に暮れて心理療法に訪れた若い女性（Aさん）の面接経過である。

Aさんは疲労が蓄積し仕事を続けられなくなり休職に至る。被災による苦悩とともにそれを理解してもらえない職場や上司に対する不満を面接では訴えていた。やがて彼女は、喪失感や心理的疲労と同時に自立の課題を乗り越えていった。面接期間は約7か月間、計14回である。

報告された28個の夢には彼女自身の姿がよく表れていた。夢は自分の見たくない姿を映し出し、その真実に向き合わされることになるのだが、Aさんは自分の問題と直面しながら自立への道を進んでいった。気分が落ち込むと被災したことを思い出して辛くなったり、他人に責任転嫁してしまうこともあったが、やがて自分の限界や問題をつつめ未熟さに気づくようになった。そして退職し、家を出て一人暮らしをし、結婚を決意した。結婚の準備をしながら個人としてのさまざまな責任に直面していた13回目のセッションで印象的な2つの夢が報告された。

【夢22】 針（8cmくらい）が両腕に一杯入っている。両腕に埋め込まれていく映像が浮かぶ。スーッと入って痛くない。ところが、鈍痛がしてくる。取り出さないといけないらしい。

取り出そうとするととても痛い。脂肪がとれるみたいな感じで取れる。少しとって痛いのでやめるが、腕全体が一杯赤黒く腫れてしまう。でも、また取ろうとしている。

「すごく気持ち悪い。映像では母が刺していたような…。なに？」と感想を述べた。

【夢23】 皮膚を脱ぐ。自分の脱いだ半透明の皮膚が脱衣カゴに丸めて

入れているが、脱いだ皮膚に赤いプチプチがある。私は出かけようとしながら、帰ったらそれを直さないといけないなと思っている。

「気持ち悪くない。帰ったら、あれを直そうと思っている。」この夢は、蛇婿入の針と、蛇皮を筆者に連想させた。

その次の14回目（最終回）には4つの夢を報告した。そのうちの1つを紹介する。

【夢26】 新人として、新しい職場で仕事をしている。

Aさんのこの3つの夢をまとめると「昔刺された針を抜き、皮膚を脱ぎ、家を出る。そして新しい道に進む」というプロセスが見える。象徴的に「針を抜き、皮を脱いだ」ことが一つのイニシエーションとなり、Aさんの個性化が進んだと考えることができる。そこで、昔話には見られない「針を抜く」という行為に注目して考えてみたい。

（3）蛇の再生

蛇婿入を蛇の視点から見ると蛇には蛇の必然性があること、さらに蛇も供犠と理解できることを先に述べた。では、娘が生き延びたように蛇も生き延びることはできないのだろうか。「生き延びた娘」と「死んだ蛇」という対で完成されたのであろうか。

ここで一つの仮説を提示したい。Aさんの夢で、腕に刺さっていた古い針は蛇に刺さった針であるという考えである。自分こそが殺された蛇であったという仮説である。つまり、蛇は内なる女性性そのもので、針を抜いて蛇を甦らせることは内なる女性性を自ら回復させることでもあると考える仮説である。

さて、水乞型で契機となるのは「偶然、男性が見ること」であったが、Aさんの契機は「自ら針を抜く」ことであった。これは社会の違いを反映しているといえないだろうか。すなわち、現代において内なる女性性は「主体的な行為」によって解放されると筆者は考える。Aさんは災害の被災者である。心理療法過程では、被災の傷を超えることと青年期らしい自立のテーマが並行して進んでいた。そのAさんが「自ら針を抜いた」ことは殺されていた

蛇を再生させ、自らの持つ異類性を甦らせることも理解できる。では、自らの中の蛇＝異類とは何であろうか。さらなる個性化のためには娘と蛇という対がこうしてともに生きること、すなわち“内なる女性性”とともに“内なる蛇性”を生きingことを夢が示唆したのではないかと考えている。

おわりに

複雑に発展した現代。異なる社会の情報が互いに多量に一齐に送信され共有される。異文化でありながら同じ道具を使用し、幼い子どもが簡単にスマホを操作するほど社会に浸透する技術。また、暴力が猛威をふるい恐怖が蔓延する。力、男性原理が席卷している。社会の構造は多様性を期待されながらも、同質の凝固体のように固まり、変容し難くなっている。これは「干天」状態なのかもしれない。身体性は阻害され、記号化された情報に翻弄される。そして、心においてもまた同様の事態が進んでいる。グレートマザーの力にすっかり飲み込まれてしまった母に、さらに飲み込まれている娘。あるいは父の支配や権力につぶされ、それでも自らを削って社会で生きようとする人々。内なる女性性はグレーリング（図1）の中に閉じ込められているか、あるいは殺されているのではないか。そのような現代では蛇性の再生がヒントを与えてくれるだろう。

Aさんの夢は、筆者に蛇の視点を気づかせてくれた。自らの中の蛇性を殺して生きingことは内なる女性性を殺すことでもあり、自らの蛇性を再生し蛇性を生かすことが、内なる女性性を生き生きとした「意志する女性」とすることができるといことではないだろうか。すなわち「針を抜く」行為は、蛇婿入姥皮型が示す個性化プロセスの現代的メタファーとして重要な示唆を与えてくれているのではないかと考えている。今後もこの問いを考え続けていきたい。

謝辞：苦しみを乗り越え、豊かな内的世界を教えてくださいましたAさんに深謝申し上げます。

註

- 1) 関敬吾編 (1978) 21 頁参照。
- 2) 織田尚生 (1993) 44 頁参照。
- 3) 関敬吾編 (1978) 24 頁参照。
- 4) 関敬吾編 (1978) 59 頁参照。
- 5) 関敬吾編 (1978) 64 頁参照。
- 6) Jung, C.G. (1948) Zur Phänomenologie des Geistes im Märchen, *Die gesammelten Werke 9/1 Die Archetypen und das kollektive Unbewusste*, Zürich, Rascher Verlag. (林道義訳 (1999) 『元型論』紀伊国屋書店、400-401 頁参照)。
- 7) Von Franz, M. L. (1975) *Interpretation of Fairy Tales : An Introduction to the Psychology of Fairy Tales*, Spring Publications. 氏原寛訳 (1979) 『おとぎ話の心理学』創元社、4-6 頁参照。
- 8) 1982 年に『昔話と日本人の心』で大佛次郎賞を受賞。
- 9) 織田尚生 (1993) 49-56 頁参照。
- 10) 昔話には、感情表現が削がれて、描かれないことが多いが、読む者はそこで自由に感情を体験している。
- 11) 小僧がかんぱり、和尚が助ける「三枚のお札」(関、1956、156-159 頁) や、母娘が魔女の助言により鬼を笑わせて窮地を脱する「鬼が笑う」(同上、63-67 頁) など。
- 12) 河合隼雄 (1982/2002) 314-330 頁参照。
- 13) 山口素子 (2009) 180-183 頁参照。
- 14) 黄地百合子 (1984) 325-354 頁参照。
- 15) 前川美行 (2015) 参照。

参考文献

- 赤坂憲雄 (2002) 『境界の発生』講談社。
- Jung, C.G. (1948) Zur Phänomenologie des Geistes im Märchen, *Die gesammelten Werke 9/1 Die Archetypen und das kollektive Unbewusste*, Zürich, Rascher Verlag. 林道義訳 (1999) 『元型論』紀伊国屋書店。
- 真下厚 (1984) 「“蛇婿入” の位相」関敬吾監修『昔話の形態』名著出版、209-236 頁。
- 河合隼雄 (1977/1994) 『昔話の深層：ユング心理学とグリム童話』+ α 文庫、講談社。

- 河合隼雄（1982/2002）『昔話と日本人の心』岩波文庫、岩波書店。
- 前川美行（2015）「針を抜く夢」について—共同体からの離脱と「個」の成立—『ユング心理学研究』第7巻第2号、91-110頁。
- 黄地百合子（1984）「姥皮型継子話の位相」関敬吾監修『昔話の形態』名著出版、325-354頁。
- 織田尚生（1993）『昔話と夢分析—自分を生きる女性たち—』創元社。
- 関敬吾（1956）『日本昔話II 桃太郎・舌きり雀・花さか爺』岩波文庫、岩波書店。
- 関敬吾（1978）『日本昔話大成2』角川書店。
- 山口素子（2009）『山姥、山を降りる』新曜社。
- Von Franz, M. L. (1975) *Interpretation of Fairy Tales : An Introduction to the Psychology of Fairy Tales*, Spring Publications. 氏原寛訳（1979）『おとぎ話の心理学』創元社。
- 吉田敦彦（1992）『昔話の考古学』中公新書、中央公論社。

Psychological Changes of Characters Described in the Japanese Folklore Tale *Hebimukoiri*:

From the Perspective of a Snake Killed with Needles

by Miyuki MAEKAWA

The Japanese folklore tale “Hebimukoiri” has various versions that have been classified into different types of tales such as “Odamaki-gata,” “Mizukoi-gata,” and so on. It is a story that has undergone much symbolic transformation as it has been handed down orally over a long period of time. The story is alive and continues to develop because of people’s changing social, cultural, and psychological lives. At the same time, it includes a significant psychological theme for not only people of old, but also for people living nowadays. In this article, the author analyzes how the initiation of the “inner woman” occurs in this folklore tale from the perspective of the mother, the father, and the daughter who are its main characters. In addition, the author suggests a new, contemporary version of the tale that contains both the symbolic significance of the action of pulling out needles and the rebirth of the snake.